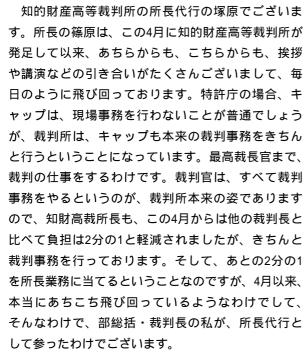
足下をしっかりと みつめながら

知的財産高等裁判所長代行 塚原朋一



今、申し上げましたように、この4月に知財高裁が 発足して、各界各分野から今のところは鵜の目、鷹 の目で、興味関心の対象となっております。「今度新 しくできた知財高裁って、いったいどんなものなん だ」ということで、テレビ、新聞などのマスコミの 取材が来たり、国内からだけでなく外国からも頻繁 に見学者が来たりしています。そういう方々の応接 で、所長も、そして我々裁判官や職員も、大変忙し い、というか、きぜわしい状況がまだ続いています。 人のうわさは75日と申します。知財高裁ができて、 もう75日は過ぎましたので、そろそろ静かになるか なと思っているんですが、まだまだ冷めやらぬ状況



が続いております。

ところで、皆さん方も、知財高裁と同じようにと いうか、知財の本家本元で、お仕事をしていらっし ゃるわけですが、今、知財は大変な知財ブームに沸 いています。ブームという言葉は、本来、小さなも のが次第に大きくなって、極限にまで膨張すると、 また元に次第に、ときにはパチンと風船が割れるよ うに、戻ってしまう、という意味を持っているわけ であります。この追い風も、いつの日か普通のそよ 風になるはずであります。我々裁判官は、今、申し 上げましたように、知財高裁に対して本当に強い、 高い期待が寄せられていることを十分承知しており ます。その期待に応えるべきものは応えますが、本 来応えられないもの、本来応えるべきではないもの は、応えることはしません。それは皆さん方の立場 でも、同じだろうと思います。

我々が行い、進むべき道は、一つ一つの案件に一 球入魂というか、全力を注いで、最も適切な結果を、 できる限り早急に、獲得するということであります。 制度がいかに変わろうとも、いかに立派な法律がで きようとも、我々が的確な目標を掲げ、そして、一 人ひとりが足下をしっかりとみつめながら、最大限 の努力を続けていくしかないわけであります。知財 ブームの追い風の中にも、いろいろなものが混じっ ているかもしれません。石や槍が入っているかもし れません。やがて、追い風でなく、逆風になるかも しれません。一番良くないのは、追い風と思ってい たら、追い風ではなく、脇から吹いて来る風の場合 でございましょう。とんでもない脇道に入っていっ





てしまうかもしれません。我々は、我々の進むべき 道を、間違いなくきちんと進んでいくべきことを改 めて強く自分に言い聞かせるべきでありましょう。

先ほど、このホテルにタクシーで入りましたら、 途中から若者の大きな集団、だいたい30歳前後、お おむね紺の背広を着た青年たちがぞろぞろと入って きました。そして、そのほとんど全員がこの大ホー ルに入って来ました。そうしたたくさんの若い方々 が、これから先、特許庁の最も大切な審査・審判の 業務を任されることになるものと思います。どうか、 いろいろ先輩に学ぶべきものは学び、学ばざるべき

ものは学ばず、大きく成長していっていただきたい、 そのように強く希望しております。

今日は、これからの知財のインフラを担う若い人 たちと一堂に会する機会をせっかくいただきました ので、いろいろと話を聞かせていただければと思い ます。本日は、このような晴れがましいパーティに、 知財高裁の裁判官、そして、東京地裁知財部の裁判 官をご招待いただきまして、ありがとうございます、 裁判官を代表いたしまして、お礼のご挨拶といたし ます。

